僕らと私の３０日間戦争

グーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕らと私の３０日間戦争

【Ｎコード】
Ｎ２７２６ＢＡ

【作者名】
グーメアー

【あらすじ】
人の意識を仮想空間へ送り込む計画”ＶＨＳ計画”。夏休みの３０日間を利用して実験の被験者となった月宮　太陽と愉快な仲間達。”絶対安全”を掲げていた仮想空間だったが、突如現れたエラーによって、絶対安全の仮想空間が戦場へと姿を変えてしまった・・・。

プロローグ

「・・・はっ！」

朝、けたたましく鳴り響く目覚まし時計の音に気づくのに数分かかってしまった。

朝ってのは本当に残酷だ。大事な時間を忘れさせるほどに快適で優しい空間を俺に提供してくれるのだから。

・・・おかげで遅刻だ。

ベッドから飛び降りて目覚まし時計を叩きつけて音を消す。多分逝った。

すぐさま学校の制服に着替えて部屋を出て居間に直行。母の言葉をスルーして食パンをくわえて家を出る。その間わずか一分。

いつもなら学校は重役登校をするのだが、今日は遅れてはならない理由があった。

「おぉ～い！太陽！」

後ろから聞こえる声。俺と同じく遅刻常習犯の男が並走してきた。

「確か今日の放課後だったよな！？」

「そうだよ！だから遅れるわけにはいかないんだろうが！」

「同じく〜！」

マラソンのように走る俺とこいつ。パンをくわえてる俺にはハンデがあるのだから、俺のポテンシャルが誉められるべきなのだ。

「よっしゃあ到着！一分前！」

全力で走ったおかげで、今日は学校に遅れないで済んだ。

チャイムが鳴る前に靴を履き替え、教室に入る。

「朝から汗びっしょりだね〜！」

「もう・・・たまには早く起きれば？」

迎え入れてくれたのは、同じクラスの速水（はやみ）　翼（つばさ）と法崎（ほうさき）　斗魔（とうま）。そして迎え入れられた俺、月宮（つきみや）　太陽（たいよう）と後ろの大空（おおぞら）　剣吾（けんご）。

迎え入れられたと同時にチャイムが鳴り、席に強制連行。教師が話始めた。

「明日から夏休みだからといって勉学を疎かにしないように！今から宿題を配るぞ！」

途端に飛び交うブーイングの嵐。それを横目に、俺達四人は再度確認した。

「今日帰ったら、すぐ太陽ん家に集合な。」

「「「おっけ〜い！」」」

再度前を向くと、大量の宿題なるものが俺を見つめていた。

とある計画

終業式が終わって速攻帰宅。すぐさま着替えて家を出る。その間わずか三分。

「遅いぞ太陽！間に合わないぞ！」

「おぅわりぃわりぃ！」

すでに待っていた三人と自転車を飛ばす。

向かうのは、高くそびえるアロー財団の所有しているタワーだ。

アロー財団が記者会見を行ったのは一ヶ月くらい前だ。その内容は至ってシンプル。とある計画の被験者を募るって内容だった。

その計画というのは、人の意思を仮想空間にデータ化(よくわからんが)して送り込むっていう話だ。この計画が成功すれば、ゲーム会社と提携して体感型ゲーム機や自分をアバターとするオンラインゲームやＳＮＳ(ソーシャル・ネットワーク・サービス)の開発。

医療業界からは模擬手術等の研究生の実践練習の開発。

アパレル業界からは服の試着や購入の短縮化等々。

つまりは夢のような世の中になるような計画だということだ。

その被験者は、一般公募から百人、ネット公募から百人、業界公募から百人の計三百人。

俺達は一般公募から選ばれて、今日、その計画の実験で呼ばれたというわけだ。

学校に遅刻してはならない理由は、遅刻すると反省文を書かされるからだ。

事前に渡された資料によると、遅刻者は被験者リストから外されるらしい。怖い怖い。

そんな訳で、俺達は速攻でアロー財団タワーに向かった。

VHS

アロータワーに着くと、黒い制服の人が中に誘導してくれた。何だが裏カジノにでも入ってる気分だ。

「こちらです。」

促されるままにどでかい扉を潜ると、大ホールに大量の人が立っていた。どうやら俺らが最後みたいだな・・・。

「あ～、コホン。被験者の方も全員集まったことですので、そろそろ企画説明に参りましょうか。」

壇上に白い髭を生やした黒服白髪のおっさんがマイクを持って上がった。

「被験者の皆さん！この度はアロー財団の企画した”ＶＨＳ計画”のテスト企画に参加していただき、誠にありがとうございます！」

ＶＨＳ？ビデオか何かか？よくわからん。

「具体的な内容は後程説明しますが故、皆さん、これから私の後についてきてください！」

そう言って、おっさんは壇上を降りて奥に歩いていった。ぞろぞろとついていく人達に合わせて俺らも歩く。

―――――――――――

たどり着いたのは、真っ暗な部屋だった。

「コホン。皆さん！これが我がアロー財団が開発した意識転送装置！”ＶＨＳ”です！」

どっから出てるかわからないスポットライトが焚かれ、姿を現したのはどでかい卵みたいな奴だった。ゲーセンで似たような奴を見たことがあるが・・・気のせいか？

「三百人分ご用意していますので、どうぞ皆さん、お好きなＶＨＳにお乗りください。」

その瞬間、三百人が押し合い圧し合いでＶＨＳに乗り込んでいく。あっという間に一杯になったＶＨＳ。空いたのは端にある四つだけ。

「俺たちも乗ろうぜ、太陽。」

促されるままに、四つの一番端に乗る俺。案外座り心地が良い。

「皆さん！頭の上にあるヘルメットを頭の位置まで下げてください！」

あぁこれか。目の位置に何か眼鏡みたいなのがついているヘルメットだ。

下げてヘルメットを被る。すると、急に視界がぼやけてきた。

「これから転送が始まります！揺れるかもしれませんがご了承ください！」

いやいや！揺れるとかの騒ぎじゃないぞ？振り回されてるようにぐるぐるする視界。まるでミキサーの中みたいだ！オェ～・・・。

気持ち悪すぎて視界が真っ暗になった。その瞬間、変な浮遊感が襲ってきた。

何か虹色のトンネルみたいな所を泳いで通ってる感覚がする・・・っていうか虹色のトンネルが見える。

次第に真っ白な光が見えてきて、俺はその光に向かって急降下していった。

仮想空間

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

はっ！

「・・・ここは？」

体を起こすと、俺の足を草がくすぐってきた。

もうここは仮想空間なのか？ただの青空と原っぱだが・・・。

「ていうか・・・皆はどこ行ったんだ？」

とりあえず歩いてみると、次第に向こう側の景色が目に入ってきた。

「うわぁ・・・。」

思わず口が空いてしまった。目の前に広がっていたのは、高い塔や立体道路が立ち並ぶ都会的というか機械的な超巨大な都市だった。

「す！すげぇ・・・！」

いつもたってもいられず、俺は都市に向かって飛び出した。

――――――――――

都市は既に人が入っていて、皆が思い思いのことをしていた。ゲームをする人、服を見ている人、探索してる人。

「さてと・・・じゃああいつらを探すか。」

とりあえず剣吾と翼と斗魔を探すことにした。あいつらのことだからゲーセンにいるんじゃないだろうか。とりあえずゲーセン街に向かうことにした。

「・・・ってゲーセンってどこにあるんだ？」

ヤバイな・・・と思った直後、腕時計の存在に気づいた。腕時計には時間が映っているのと、何かボタンがある。

「Ｈｅｌｐ・・・？」

助け・・・か？とりあえず押してみた。

ヴィン・・・。

「うわぁ！」

ボタンを押した瞬間、腕時計が光を放ち、その光が空中で地図になった。成る程・・・そういう仕掛けか。

「えっと・・・ゲーセンは・・・東か。」

現在位置が光の点で示されているから分かりやすい。ゲーセンに向かって東へ行こう。

「・・・ん？」

地図の左下が光ってる？押してみると・・・。

「被験者Ｎｏ．２９６　月宮　太陽。」

うわぁ！さっきの白髭のおっさんが出てきた。

「今回、被験者の皆様にはこの仮想空間の中で数日暮らしていただきます。生活に必要な物は個人に用意された部屋に全て用意されていますのでご安心ください。食料品等は全て西区の商店街で買うことができます。」

あぁ、確かまだこの実験の意図を説明されてなかったな。要はここに住めってことか。

「この実験は”絶対安全”の看板を背負っております。皆様がより住みやすくなるようにアロー財団技術部一同、最善の努力を尽くします。何かあったらお近くの据え置き通信機から我々にお申し付けください。」

まぁ、多少の危険はあるだろうが、サービスの良いホテルだと思えば安いもんだな。

「さぁてと、とりあえず東へ行くか。」

白髭のおっさんと地図を消して、俺は東に向かって歩き出した。

謎の少女と歪み

東は若い世代の被験者で賑わっていた。

それもそのはずだ。この辺にあるのは体感ゲームセンターや遊園地が混在してる言わば”娯楽空間”だ。

「あいつらはどこにいるんだ？」

とりあえず目のついたゲーセンに入ってみる。

戦車に乗って向かってくる敵機を破壊するゲームや、リアルガンシューティング等のゲーム音がかなりうるさい。さっさと見つけて出ていこう。鼓膜が持たない。

確か剣吾は格ゲーが好きだったはずだから・・・奥の方だな。基本的なゲームの配置は普通のゲーセンと変わらないのは、財団側の親切設計なのだろうか？

「おぉい！剣吾君ー！」

反応がない。体感格ゲーに誰かいるのはわかるのだが、どうやら違う人みたいだな。他を当たるか・・・。

ドンッ！

「うわぁ！」

「きゃ！」

誰かとぶつかった！

「いてて・・・ごめんなさい。大丈夫ですか？」

ぶつかった人は同年代ぐらいの女の子で、地面に座り込んでしまっていた。とりあえず手を差し出すと、弱々しく掴んでゆっくりと立ち上がった。

「あ、ありがとうございます。」

女の子は頭を下げた。

「あの・・・被験者の方ですか？」

「え？そうだけど・・・。」

そう言うと、女の子はきびすを返したように俺に背中を向けて走り出した。

「今すぐログアウトしてください！もうじきこの辺は占領されます！」

そう言って、全速力で走り去っていってしまった。

「・・・？何だ？占領？」

あの子は何を伝えたかったんだ？占領って何に占領されるんだ？

ていうか・・・何で被験者か聞いてきたんだ？ここには被験者しかいないはずなのに・・・。

「・・・”絶対安全”だよな？」

さっきの白髭のおっさんが言ってた言葉を呟いてみた。

・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・。

「何だ・・・？」

変な違和感に囚われて、思わず後ろを振り向いてしまった。

いや、振り向いてよかった。振り向いた先に真っ黒な歪みが出来ている。

「うわぁ！なんだこりゃ！」

後ずさりしたと同時に、黒い歪みが形になって現れた。

歪みは人の形になっていた。しかも右手には殺傷能力十分の刀らしき物が！

「シシシ！シンニュウシャ！ココココ！コロス！」

歪みは刀を振り上げて俺に向かってきた！

「な！なんだてめぇは！」

俺はとっさに近くにあったリアルガンシューティングのガンを握って構えた。効くかどうかはわからんが、やるしかない！

「ココココ！コロス！」

あいつは俺に向かってまっすぐやって来る。単純だ。

「一発で仕留めてやる！」

まっすぐやって来る分狙いやすい。とりあえず心臓と思われる（向かって）右胸を狙って放ってみた。

ヒュン！

「グワァァァ！」

弾は勢いよく発射され、あいつの右胸を貫いた。あいつは悲痛な叫びを上げたまま倒れた。

「な・・・何なんだ・・・？」

何で”絶対安全”を掲げる場所で殺されかけなきゃいけないんだよ。何かおかしいぞ？

「どうなってやがるんだ！？おい！財団！」

腹が立った俺は据え置き通信機で文句を言いに行こうとゲーセンを出た。

「！！！」

ゲーセンを出た瞬間に目に飛び込んできたのは、道路に散らばった少数の人の倒れた姿だった。

避難場所へ

訳がわからない。何で人が倒れているんだ？

「・・・もしもし？」

話しかけてみるが返事はない。持ち上げてみるが何の反応もない。

「・・・脈は・・・あるよな？」

データ化しても脈ぐらいはあるよな？確かめてみよう。

「・・・！」

背筋が凍った。

「・・・脈が・・・ねぇ・・・・。」

認めたくないが・・・この人は・・・そして他の人も・・・・。

「・・・死んでる・・・・。」

何で人が死ぬんだ？意味がわからない。

「やべぇ・・・早く何とかしないと・・・・！」

落ち着け！落ち着け俺！とりあえず財団に問い合わせて見よう！

向こうに頼めば万事解決だ！そうと決まれば早速据え置き通信機へ！

―――――――――――

据え置き通信機に着いたと同時に俺は叫んだ。

「おい財団！どういうことだ！人が死んでるぞ！何かが襲ってきたぞ！絶対安全じゃないのかよ！？」

通信機から声が聞こえた。

「落ち着いてください！我々技術部一同、原因を早急に発見して対処いたします故、今は自分の部屋に避難してください！」

一方的に言われ、通信機はそこで途絶えた。

「おい！どういうことなんだ！説明しろ！」

反応がない・・・財団の奴らめ！こっちからの声を遮断しやがったな！

「くそ！」

通信機を思いっきり蹴る。腹の虫がおさまらないがとりあえず避難が先だ。

「確か・・・俺の部屋は北だったっけか。」

さっき見た地図を思い出して、俺は走り出そうとした。

「太陽！！！」

後ろから名前を呼ばれた。振り向くと、剣吾が走ってやってきた。その両手には、何故か剣が握られている。

「剣吾・・・それは？」

「南区も変な奴らが暴れてやがった！とりあえず撃退できたが、何人か殺られちまった！」

南区でも人が？

「南区のゲーセンから体感ゲームのコントローラー持ってきたんだ。何故だかわからんがあいつらに有効な武器らしいからな。」

なるほど、だからあの時ガンが効いたんだ。

「ほら、お前の分だ。俺達四人共同じマンションの同じ階だ。」

剣吾が渡してくれたのは青い剣だった。剣吾の剣が赤いのを見る限り、俺の剣は２Ｐのコントローラーみたいだな。

「行くぜ太陽！」

俺と剣吾は避難場所である部屋に向かって走り出した。

仲間を探しに

剣吾と二人で北の避難場所を目指して走る。

途中、さっきゲーセンで戦ったやつとそっくりな奴も見たし、そいつらに殺られたであろう人達の姿もあった。

とりあえず通り道にいた敵は俺と剣吾で倒した。これぐらいなら、いつも剣吾達とやってるチャンバラよりも緩いぐらいだ。

そんなことをしながら数十分走ると、高い建物が俺達の前に現れた。

「ここの十階だ！急ぐぞ！」

剣吾はダッシュで建物に入っていく。俺も二段飛ばしで階段をかけ上がる剣吾についていく。

そして十階にたどり着くと、剣吾は迷うことなく一つのドアの前に立って腕時計をかざした。

腕時計から赤い光がドアに向かって放たれ、光が消えた時に鍵が開く音が聞こえた。

「お前の部屋はそこ。詳しくは中に入ってからだ。」

剣吾が隣のドアを指差すと、そのまま中に入っていってしまった。

「ちょ！待てよ！」

剣吾が入っていった後、俺は訳もわからずに立ち尽くした。

「とりあえず・・・入ろう。」

やり方はまぁ同じ感じでやればいいだろう。

「ほら。」

ドアに向かって腕時計をかざしてみると、俺の腕時計からも光が放たれた。

ガチャ！

「おぉ！開いた開いた！」

入ってみると、中はホテルの一室みたいだった。大きめのベッドに・・・トイレに風呂？テレビまである。

「ここって・・・データの世界だよな？」

データの世界でも生理現象は起きるのだろうか？

ジリリリリ！！！

「わわわ！」

びっくりした！腕時計から急に音が鳴りやがったぜ！

「何だ何だ？」

”Ｃａｌｌ”って書いてる青いボタンが点滅してる。押せってことか？

とりあえず押してみる。

「太陽、聞こえるか？」

聞こえてきたのは剣吾の声だった。なるほど、通信機みたいなものか。

「あぁ！聞こえるぞ。」

「なぁ、あれは一体何なんだ？」

やっぱり剣吾も怖いらしいな。当たり前か、目の前で人が死んでるんだもんな。俺も怖いし・・・。

「さぁな、俺もわからねぇ。
それより翼と斗魔は？」

「それが・・・。」

剣吾が黙った。まさか！

「死んだのか！？」

「違う・・・繋がらないんだ・・・。」

そう言われた時、俺は剣を握ってドアを蹴り開けて外に出た。

「太陽!?どこに行く気だ!?」

「決まってるだろう!あいつらを探しに行くんだよ!」

俺は階段を一気にかけ降りてビルを出た。

「よぉ!」

「!?」

ビルの前に、同じく剣を持った剣吾が立っていた。

「考えることは同じってことだよ。」

「・・・カッコつけやがって・・・。」

「うるせぇ!」

ちっ・・・悔しいが今回は剣吾の一人勝ちだな・・・。

「んじゃ行くぜ!俺は西、お前は東だ。」

「了解!見つけたらここに連れてくる!」

そう言って、俺達はそれぞれ別の道に向かった。

東区捜索

全速力で東に向かって走る。

「くそ・・・あいつらどこにいるんだ？」

大声を出して呼びたいところだが、奴らに気づかれると厄介だから自粛しよう。

「あいつらのことだ・・・ゲーセンに隠れてたりとかか？」

そう思った俺は、近くのゲーセンに入った。

「どこにいるんだ・・・。」

草の根を分ける勢いで探すが、人影すら見当たらない。

・・・ドクン・・・ドクン・・・。

「・・・！？」

何だこの違和感・・・あの時感じたのと同じ感覚・・・まさか！

「！」

剣を構えて振り向くと、予想通りだった。

「歪み・・・敵か！」

入り口近くの戦車ゲームに歪みが出来ている。歪みは戦車型コントローラーを取り込むと、ゆっくりと形を変え始めた。

「・・・！」

剣を持つ手をさらに強めて攻撃に備える。

やがて歪みはコントローラーの戦車とは違う戦車へと姿を変えた。戦車は周りを見渡すように動くと、俺に向かって砲台を向けた。

「侵入者・・・殺す！」

砲台が発車準備に入った！

「ヤバイ！」

すぐさまゲーセンを出ると、後ろでゲーセン内が爆発して黒煙が上がっていた。

「これはヤバイ・・・！」

とりあえず離れなければ！俺はダッシュでそのゲーセンを離れた。

後ろからキャタピラーの音が聞こえる！追われてる！

「やべぇ！誰か！」

助けを呼んでみるが反応がない。このままじゃ・・・死ぬ！

「侵入者！殺す！」

ちくしょう！これ以上逃げても追いつかれるだけだ！ならばいっそ！

俺は立ち止まり、振り向いて剣を構えた。捕まって死ぬぐらいなら戦って死んでやる！男は当たって砕けろだ！

「うぉぉぉぉ！！！」

駆け出して斬り込んでやろうと思った瞬間、横から何かが飛来してきた。

「うわぁ！」

思わずのけぞる。飛んできた物体は戦車の横を直撃して、そのまま横のビルに突っ込んでいった。

「・・・。」

煙が上がる中、訳もわからずにしていると、急に声がかけられた。

「君！大丈夫か！」

煙の中からやって来たのは、俺よりも年上の男だった。

「ここは危険だ！早く君も避難するんだ！」

「待ってくれ！俺は友達を探しに！」

「コードを持ってない君は今は生き残ることだけを考えるんだ！」

そう言って去っていった。

「！？」

去っていく男の右足を見て、俺は度肝を抜かれた。

「何だ・・・あの靴・・・。」

その靴は、金色でゴツゴツした脛まで包むでかい靴だった。あんな靴どこで売ってるんだ？ていうか売り物なのか？

やがて煙が晴れると、さっきの戦車がどうなったかが見えるようになった。

「うわぁ！」

俺はその光景にも驚いた。戦車はビルに突っ込んで形を崩していた。そしてその傍らにあるのは、さっき飛来してきたであろう物だった。

「これ・・・ワゴン車・・・？」

ワゴン車が飛来してきたのか？どうやって？

「あの男の仕業なのか・・・？」

訳がわからん！一体何が起こってるんだ！

ジリリリリリ！

「ん？剣吾からの通信？」

見つかったのか！？とりあえず出てみる。

「太陽！西区にはいないみたいだ！今東区に向かってるところだ！」

「わかった。とりあえずどっかで落ち合おうぜ。」

通信を切って、わからないことだらけの頭をそのままに、俺は再び走り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2726ba/

僕らと私の３０日間戦争

2012年1月9日00時00分発行